

# 中国の朝鮮戦争への参戦に関する研究

## ～毛沢東の参戦動機の再検討～

于 麗雅

### 【修士論文概要書】

#### 1. 研究の背景

近年、北朝鮮の核・ミサイル開発問題や、非武装地帯での地雷爆破事件などにより、朝鮮半島の緊張は高まっており、日、中、米、ロを含む国際社会からも注目されている。特に、中国は隣接する北朝鮮に大きな影響を及ぼす存在であり続けた。他方で、長年の経済援助や近年の核実験問題のように、中国は北朝鮮との関係には苦慮してきた面もある。では、両国の関係が始まって間もない時点で勃発した朝鮮戦争（1950年6月～1953年7月）の時期での両国の関係はどのようなものだったのであろうか。そもそも中朝両国は「血で結ばれた同盟」と呼ばれてきたが、最近、そのような美化された関係に疑問を呈する主張も出てきている。中朝関係は東アジアの国際関係の中でも重要な部分であり、中朝関係を明らかにすれば、東アジア全域の総合理解にも貢献できると考えられる。

#### 2. 研究の意義

中朝関係の初期において、その後の関係まで決定づける出来事となったのは朝鮮戦争であり、中国が朝鮮戦争に参戦したからこそ、現在に至るまでの東アジアの国際関係を決定したと言える。すなわち、もし、中国が朝鮮戦争に参戦していなければ、現在の東アジアの国際関係もまったく違ったものになっていたと考えられる。一方で、今日においても朝鮮戦争は謎が多い戦争であり、当時の中国の北朝鮮への参戦政策の決定過程も複雑であった。

中国の参戦動機については、学术界にも論争が多い。冷戦終結以降、ロシアのアーカイブの公開によって、中国の朝鮮戦争への参戦の政策決定過程の一部については、次第に解明されつつある。当時の中国共産党政治局の中では、出兵すべきか否かについて大きな論争があり、出兵を主張したのは毛沢東であった。周知のように、中華人民共和国は1949年に建国され、また、長年の内戦で国内の至る所が破壊されており、当時は、まだ貧しく、弱い国だった。しかし、それにも関わらず、毛沢東は朝鮮戦争への出兵を強く主張した。なぜ毛沢東は、国外の朝鮮半島にまで義勇軍を派遣することを積極的に主張したのだろうか。毛沢東の参戦動機に関する研究は、朝鮮戦争研究の中の一部となるため、毛沢東の参戦動機を解明する前に、まず、朝鮮戦争研究全体を把握する必要がある。

### 3. 論文の構成

本論文においては、まず、研究の背景と問題の所在を提示した上で、これまでの朝鮮戦争に関する先行研究を整理する。朝鮮戦争に関する先行研究は極めて多く、最も盛んに研究が行われている国は、当然、戦争にかかわった中国、アメリカ、韓国、ロシアである。本論文においては、朝鮮戦争に関する先行研究を踏まえた上で、朝鮮戦争研究を三つの研究段階に分けることとする。すなわち、朝鮮戦争研究の第一段階は1980年代以前であり、第二段階の研究は80年代後半から2000年頃まで、また第三段階は、2000年以降となる。その上で、なぜこのような段階に分けたのか、また、各段階の朝鮮戦争研究においてどのような研究成果があるのか、どのような資料に依拠したのか、そして、どのような特徴があるのかについて説明する。

次に、本研究分析の枠組みを述べる。分析の枠組みとして、まず四つの時期に分けて分析する必要がある。すなわち、金日成が南進する前の1950年5月、1950年6月25日の金日成の南進開始、9月15日からの米軍（米軍を中心とした国連軍）の仁川上陸及び10月7日の米軍による三十八度線越境である。それぞれの時期における朝鮮半島の戦況は、毛沢東の考え方にも影響を与えている。そして、米中間の認知・誤認知、および毛沢東の参戦政策の合理性の観点から分析を進める。

毛沢東の参戦動機を分析する前に、まず朝鮮戦争の背景を述べる。1950年5月、朝鮮戦争が勃発する前に、中国人民解放軍は台湾解放に向けて積極的に準備を進めていた。毛沢東は金日成の武力による南部解放の方針に対し、米国の干渉を招く可能性があるという要因を除けば、反対ではなかった。しかし、毛沢東は台湾を含めた中国統一が達成された後に、金日成が国家統一を実現することを望んだ。しかしながら、結局、すでにスターリンの支持をとりつけていた金日成を支援せざるを得なかった。つまり、毛沢東が、この時期に金日成の南進要望に反対する理由は、まず米国の干渉を招くという点のみであり、それよりも先に、まずは自国の国家統一を実現したいという事情であった。

1950年6月25日、朝鮮戦争が勃発し、これに対し、米国はすぐに派兵して干渉した。毛沢東は直ちに東北地方に辺防軍を設立し、不測のために準備していた。そして、毛沢東は金日成の南進最中に度々ソ連と北朝鮮に、敵軍の後方上陸に注意すべきと提言していた。更に、毛沢東は中国軍を派遣し、朝鮮軍服を着て朝鮮軍と一緒に戦うと提案した。しかし、スターリンの承認をもらっていないということで、金日成は中国に参戦の要請を出せなかった。そこで、中国は最も参戦のいいタイミングを失った。

1950年9月15日、米軍の仁川上陸成功により、北朝鮮軍の補給路が絶たれ、戦況は大転換した。中国は即座にソ連と北朝鮮に対して、出兵を要求した。その目的は、北朝鮮軍が北部に撤退する際に、三十八度線付近に防衛線を敷いて、米軍の北上を防ぐためである。しかし、中国の参戦要求は再びスターリンに無視され、二度目の有利な参戦の機会を失った。もしこの時期に中国が義勇軍の名義で参戦していたら、米国の北上を止められていたはずである。

1950年10月1日、韓国軍は三十八度線を越え、北上を開始した。スターリンと金日成は同時に毛沢東に参戦を要請し、対朝直接援助を依頼した。しかし、中国の指導者の大半は、すでに望ましい出兵のタイミングを失っていたため、出兵には慎重になるべきだと主

張した。それに対し、毛沢東は、終始出兵すべきと主張し、他の指導者を一人ずつ説得し、最終的に出兵を決断した。

先行研究における毛沢東の参戦動機の諸説においては、まず 1980 年代以前に、アメリカの政治学者であり中国の対外関係を専門とする Allen S. Whiting は、「朝鮮半島全体が米国に占領されれば、アジア地域における中国の威信が傷つけられることになり、米国が蒋介石とともに大陸に反攻する危険性も増える。更に、参戦により世界に新中国の存在を主張し、中国の国際的地位を高めることもできる」と述べている。日本の研究者である平松茂雄は、中国が参戦した政治上の目的は「究極的には中国の主導の下に朝鮮半島を統一することにあった」と指摘している。また、神谷不二は「中国の軍事介入は、鴨緑江の発電施設とか満州の工業といった特定の限定的目的が理由ではなく、より広い関心の所産である」と論じ、具体的には「アジアにおける中国の役割、新政権の対内的、かつ対外的安全保障」などを挙げる。

冷戦の終結にともない、朝鮮戦争に関する大量のアーカイブ文献と口述資料が公開されるようになった 90 年代初期に、各国の学者、研究者の間に新しい見解が出た。米国学者 T・クリステンセンは、戦争勃発後、トルーマンが第 7 艦隊を台湾海峡に派遣した時点で、毛沢東は米国による中国侵略の意図に警戒心を持ち、軍事的対応を準備したと述べている。更に、10 月 7 日に米軍が三十八度線を越えて北上したことで、米国の中国侵略の意図を確信したからこそ、中国が義勇軍を送ることを最終的に決断した、とも述べている。在米華人研究者 Chen Jian は、中国の出兵はただの地政学、安全保障的考慮より、もっと広い複雑な背景があると指摘する。それは毛沢東の革命世代が持つ理想主義と情熱、そして国際政治において一つの主要な国力を有する国家になりたいという渴望、また、我慢できない「米国の傲慢」に対するチャレンジ精神、国際的影響力を向上させる計算、および中国の民衆に対して建国以後も革命を持続させる政治動員の手法、というような多くの狙いが含まれると論じている。

#### 4. 結論

毛沢東が多数の反対者を押し切って、参戦の主張を終始一貫して譲らなかった動機については、依然、研究者の間では様々な分析と見解があるが、これまでの分析を踏まえ、以下のようにまとめることができる。強い対米アレルギー、自国の安全保障、中ソ同盟体制強化、および毛沢東の社会主義陣営に責任を負う使命観、という 4 つの側面が毛沢東の参戦決定の基本的動機を構成した。毛沢東の参戦に関する考えは複数の思惑が重なった結果であり、異なる時期と外部環境に直面して、どの点を重視するかということであった。社会主義陣営に責任を負う使命観と強い対米アレルギーが毛沢東の最初の決断を触発したが、自国の安全保障、および中ソ同盟体制を強固する観点から、最後の決断に至らしめた動機でもあった。毛沢東の参戦決断は、中国の国益を確保し、中国にとって合理的に導かれたものである。

## 5. 今後の課題

朝鮮戦争への参戦決定が行われた後に、毛沢東の独断にますます拍車がかかった。中国指導部内には会議討論を通しての政策決定作成プロセスが存在していたが、どのように機能していたのだろうか。1950年10月2日および4日、5日の政治局拡大会議の記録は今日まで公開されていない。これは、毛沢東の参戦動機研究の大きな障害である。毛沢東の参戦動機研究が次の段階に入るために、それらの会議記録の公開を期待する。